

---

# 再び、その運命救います

御風達弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

再び、その運命救います

### 【Nコード】

N1235F

### 【作者名】

御風達弥

### 【あらすじ】

世に世界は八百万。苦しみの運命を背負うものは数知れず。そんな人々の運命を救うべく、連休明けの二人が今日も行く。次の連休まで、しっかり仕事、やらせていただきます。

## 第一話「連休終わりました」（前書き）

作中に登場する固有名詞は、実在の物とは一切関係ありません。

## 第一話「連休終わりました」

朝の光が、カーテンの隙間から彼女の顔を優しく照らす。

鳥の囀りが、心地よいリズムとなって朝の風景に花を添えている。  
心地よい朝。

そう。前の連休明けも、こんな朝の風景から始まっていた。そして、目を覚まさない彼女へ、強烈に朝を告げる、

……ゆ~~~~~~~~っ！

ベコンツッ！

「へぶっ！」

強烈に朝を告げる金だらいが直撃した。

「起きましたか？」

「…起きたわよ。」

「じゃあ、朝食食べて準備してくださいね。」

「その前に一言物を尋ねたい。」

「なんでしよう？」

「なんなの？これは。」

「金だらいです。」

「見ればわかるわよ。」

「じゃあ聞かないでください。」

「ごめんなさい。」

「わかればよろしい。」

「そうじゃなくて。」

「なんですか？」

「私が聞きたいのは、何で私の顔の上に金だらいが落ちて来たのか、  
つてことよ。」

「セツトしたからですよ。」

「誰が？」

「私が。」

「なんで？」

「あなたが起きないからです。」

「他に方法は考えつかなかったわけ？」

「はい。」

「嘘つけええええつつ！」

小鳥達は、一斉に飛び立ってしまった。

「仮にも女の子を起こすのに金だらいつてどーゆーこと！？あんた  
も男性の端くれなら、もっと紳士的な起こし方ってものがあるでし  
よーがつ！」

「紳士的な？」

「そうよっ！」

「例えば？」

「た、例えばっ！？」

「はい。」

「た、例えば…。ほ、ほら、なんか貴族のお嬢様を起こす風とか！  
焼きたてのクロワッサンと煎れたてのカフェオレの香りなんか漂わ  
せちゃったりなんかして、ドアの外から軽くノックを二、三回。お  
嬢様、朝でございます。みたいな。」

「それであなたが起きると思えないのですが。」

「ど、どーゆー意味よ。」

「ドアの外から声をかけて起きるくらいの相手なら、わざわざ金だ

らいをセットするような手間は最初から要らない、ってことですよ。

「し、失礼な！私だってその気になれば…」

「……………」

「…ほ、ほら！早く支度しないと遅刻しちゃうじゃない！さつさと朝ごはんにするわよっ！」

「…ごまかせたつもりなんでしょうかね？あれで…。」

…まあ、そんなこんなで朝食が終わり、朝の支度も一通り完了。

「うん、今日も決まってるわ！私ってば」

「いつもと変わらないと思いますけど…？」

「いつもバッチリ決まってるってことよ。」

「あ、なるほど。」

「…相変わらず、そこはつつこんでこないのね。」

「だって、いつも綺麗に決まっているのは本当の事ですから。」

「…あゝ…ま、まあいいわ。さつさと門開けて。」

「はい。」

黒のカッターシャツに黒のスラックス姿の二人。これから仕事へと出勤である。

が、彼らの出勤先は…

「よいしょ。」

リビングのカーペットをめくり上げると、そこに現れたのは魔法陣。その魔法陣に向かって、

「ゲート。」

力ある言葉を投げ掛ける。すると、静かな鼓動と共に魔法陣から門が出現し、その扉を開けた。

「それでは、今週も仕事を頑張りましょう。」  
「はいはい。」

世に世界は八百万。

一つの世界に暮らすものは他の世界の存在を知らないが、世界は確実に、驚くほど数多存在している。

そしてそれらの世界には、

必ずといっていいほど、苦しみや哀しみの運命を背負わされている者が存在する。

自らの力だけではどうすることも出来ないような、運命の枷をはめられた者達。

そんな者達の運命を救う仕事。

救済士。

運命の女神の導きに従い、どんな世界にも降り立って、相手を苦しみの運命から解き放つ。

それが、救済士の仕事。

フィーアとウィング。それが、世でただ二人の、救済士の名前。

「...。」

部屋の中央に、女性らしき人影が佇んでいる。

純白のローブとフードをその身に纏い、フードの隙間から、微かに

口元だけが覗いている。

静寂が支配する部屋の中、不意に女性が振り返った。

「来ましたね、フィーア、ウィング。」

女性が振り返った視線の先。そこに、先ほどの二人が立っていた。

「ただ今戻りました、デイスティーナ様。」

「二人とも、連休はいかがでしたか？」

「そりやもう、満喫させていただきましたですよ。もう少し休みが続いてもいいくらい いや、むしろ続いてほしいくらい。」

「残念ながら、それは出来ません。週一休みですら取れない会社がある昨今、定期的に連休がとれることを逆に感謝なさい。」

「はい。」

「世に世界は八百万。救っても救っても、苦しみの淵でもがく命は数知れず。そんな命達の運命を救えるのは、あなたがた二人だけ。大変でしょうが、よろしくお願いします。」

「はい。」

「では早速、今日の仕事です。」

そう言つて、静かに手をかざすデイスティーナ。その手の下に、巨大な水晶球が出現した。

無色透明な水晶球の中に、何かの姿が映し出された。

「…これは？」

「…二人？」

水晶球に映し出されたのは、二人の人物。筋骨隆々の男性と、痩せ気味な体型の女性。

「今日は、同じ世界ではありますが、別々の場所へ向かってもらいます。」

「え！」

「休み明け最初の仕事から単独任務ですか？」

「はい。」

フードの下からわずかに覗く口元に笑みを湛え、デイスティーナは



言葉を続けた。

「まず、フィーアに向かっていたただくのはこちらの男性の方。リングネームはファイヤーストーム燃鬼<sup>もえき</sup>。」

「り、りんぐねーむ？」

「格闘家の方ですか？」

「プロレスラーです。」

「ああ…なるほど。」

「で、その燃鬼さんがどんな苦難の運命を？」

「彼の苦しみの運命、それは、彼が強すぎることです。」

「あゝ、つまりあれですね？まともに戦える相手がいないから、ラストレーション溜まっちゃってるってわけだ。」

「まあ、有りがちなパターンですね。」

「確かに有りがちです。が、それだけではありません。」

「へ？」

「彼には、強すぎる以外にも重大な悩みがあるのです。それは…」

「…？」

「本名が萌黄<sup>もえぎ</sup>萌春<sup>もえはる</sup>だということです！！」

「…なんですと？本名が？」

「萌黄萌春？」

「ああ…何と辛い宿命。」

「知るかあんなもんっ！！そんな悩みは親に言え親にっ！第一、あたしにそんな悩みぶつけられても、どうしようもないでしょが！」

「どうにかして彼を改名してください。」

「どうせいつちゅーんですかあっ！？」

「次にウィングですが、」

「流すなあっ！！」

「ウイングには、こちらの女性のところに行ってもらいます。リングネームは…」

「またリングネーム!?!」

「初日はプロレスラー特集ですか?」

「っていうかこの人選って、ディステイーナ様の趣味なんじゃないの?」

「最近プロレス観戦がお好きなんですね、ディステイーナ様。」

「戦争に巻き込まれたとか、異星人に拉致されたとか、もっと救いが必要な人って沢山いると思うんだけどなあ。」

「世に世界は八百万。その中からあえてプロレスラーを二名も選出するあたり、公私混同甚だしい感じですね。」

「……………」

…ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「わ!?!わわわわわわっ!?!す、すいませんごめんなさい申し訳ございませんっ!?!」

「し、少々我々、言葉のおふざけが過ぎましたようで、申し訳ございません。」

「わかればよろしい。」

ゴゴゴゴ……………

「…はあ…びつくりしたあ。」

「つべこべ言わずに、あなた方は仕事をこなさない。」

「はい。それで、この人は?」

「彼女のリングネームはアテナ。ニックネームは勝利の女神。」

「そのままですね。」

「ある意味そのままです。が、決していい意味ではありません。」

「?」

「彼女の、勝利の女神、というニックネームは、対戦相手にとっての、なのです。」

「…つまり？」

「めちゃくちゃ弱いんです、彼女。デビュー以来、勝ったことがありません。」

「なるほど。で、仕事内容は、彼女を試合で勝たせること、で、よろしいですか？」

「さすが。飲み込みが早いですね。」

「…いや、普通にわかるでしょ、そこまで来たら。」

「というわけで、行つてらっしゃい。」

「めっちゃ淡泊な見送り方ですねえ…。」

「今に始まったことではないですけどね。」

休み明け一発目から、主の趣味全開の仕事内容。

今週の二人の仕事は、こんな感じで幕を開けたのだった。

## 第一話「連休終わりました」(後書き)

やっと書けました……。超スローペースですが、温かい目で読んでいただけると嬉しいです。

## 第二話「レスラーの運命救います(1)」(前書き)

作中に登場する固有名詞は、実在のものとは一切関係ありません。

## 第二話「レスラーの運命救います（１）」

「というわけでやってきたわけだけど…」

とある世界、とある街の公園に降り立った二人。が、二人の表情は最初から曇っていた。

「聞きそびれたことがありますよね。」

「そーなのよねえ…。」

「私達つて、どういう立場なんでしょうね？今回。」

「うーん…？」

立場。八百万の世界を巡る彼らにとって、これは重要なポイントである。

「ファンタジックな世界とかなら、旅人とかでなんとでもできるんだけど…。」

「ここはどう見ても違いますからね。」

「しかも今回は個別でしょ？女が男性レスラーのところに尋ねていく理由って何？ファン？」

「私の方も状況は同じですよ。しかも、ファンっていうだけだと門前払いになりかねませんし…。」

「性別が違うから、入団希望者、ってわけにもいかないわよねえ…。」

「ん…。」

すっかり悩んでしまった二人。と、

……案ずることはありません。

「あ、デイスティナ様。」

天からの声が、二人の元に届いた。

……あなたがたの立場はちゃんと考えてあります。今日、あなたが

たが向かう団体には、新任のメンタルトレーナーがやってくること  
になっているのです。

「めんたるとれーなー？」

「精神的な面でのトレーナー、ですか？」

「なるほどお。それなら自然とターゲットと接することが出来ます  
ね」

「あの、ディステイナー様。少し疑問があるのですが、よろしいで  
しょうか？」

……どうぞ。

「なんで、フィアが男性のところで、私が女性のところなんですか？  
同性の方が仕事しやすいと思うのですが……」

……確かにその通りです。ですが、男女を入れ替えたこと。これに  
は、深い意味があるのです。

「おおっ！？なんなんですか？意味って。」

……それは。

「それは？」

……男女入れ替えた方が、私が見ていて面白そうだからです！

「……………」。

と、いうわけで。あとはよろしく。

.....。

「..... まあ、なんていうか.....」

「割と予想通りの感じの返答だったわね。」

「（ため息.....）.....仕方ない。行きますか。いつまでもこうしてるわけにもいきませんし。」

「まあね〜。仕事だから仕方ないわ。」

「ところでフィーア。あなたの救う相手の名前、ちゃんと覚えてますか？」

「なっ！馬鹿にしないでよねっ！それでも救済士の端くれなんだからねっ！」

「じゃあ、答えてください。」

「え！？なんでよ！」

「忘れてる気がするからです。覚えてるなら答えてください。」

「...いい、いいわよ...。だから、ほら、あれよ。改名するのが必要な名前よ。」

「そうです。」

「その〜、だから...。」

「.....。」

「.....。」

「.....。」

「鼻詰まり微熱太郎！」

「...萌黄萌春です。」

「.....。そ、そうそう！すっかり改名後の名前言っちゃったわ。」  
「悪化させてどうするんですか...。」

若干？の不安を感じながらも、それぞれの仕事先へと向かった二人。



果たしてこの単独任務、無事に成功するのだろうか。

「はい、本契約も済んだことだし、早速仕事に入ってもらいたいんだけど、いいかな？」

「勿論です！仕事のために来てるんですから。」

「お、やる気あるねえ。いいことだ。しかし、君も珍しいよねえ。こんな厳つい男だらけの職場にトレーナーとしてやって来るなんて。」

「私、筋肉フェチですから！」

「はは、あまり変なことしないでくれよ？」

初っ端から勢い全開のフィア。やる気になっているのか自棄なのかは微妙なところ。

彼女がやって来たのは、この世界では老舗のプロレス団体「爆炎プロレスリング」。名前からして熱血全開である。

ここはそういう方針なのか、社長自らによる事務所での契約を済ませ、フィアが次に連れて来られたのは併設されている道場。どうやらここは、事務所と道場と宿舍が同じ敷地内にあるらしい。

（鼻詰まり…じゃなくて、萌黄は…）

社長がフィアのことを紹介している間、彼女は今回の救済相手を探して視線を走らせていた。が、水晶玉で一見しただけの相手を十数人の中から見つけ出すのは面倒になっただけならしく、

（ま、どうせ向こうからやってくるでしょ。）

恐ろしく気楽な思考と共に探すのをやめた。

一方、

「……………」

「どうだったかしら、トレーナーさん。」

「全体的に、組むときに一瞬視線が下がってますね。自信が足りないのか、癖なのか。どちらにせよ、直した方がいいですよ。」

何故か普通にコーチをしてしまっているウイング。

彼がやってきたのは発足してまだ数年という新興団体、「プロレスリングEF」。EFはヨーロッパファンタジーの略らしく、六人の所属選手のうち四人のリングネームに、北欧神話の神の名前がつけられている。

人数が少なければ、その分トレーナーとして、一人に接する時間は多くなる。ウイングにとっては好都合だったのだが、

（…メンタルじゃなくてテクニクの領域ですよ、これ。）

何故だかメンタル以外の部分も任されてしまっていたのだった。それに關して説明を求めると、

「戴いた資料には、メンタル以外の技術的な指導も出来ます、って書いてあるけど。」

とのこと。

（デイスティーナ様：絶対わざとですね。）

心で深いため息をつくウイングだった。

## 第二話「レスラーの運命救います(1)」(後書き)

最近めつきりスローペースな執筆となってしまうておりますが、  
懲りずに読んでいただけると嬉しいですよ( ^ - ^ )o

### 第三話「レスラーの運命救います(2)」(前書き)

作中に登場する固有名詞は、実在のものとは一切関係ありません。

### 第三話「レスラーの運命救います(2)」

「さて、と。」

場所は変わってとある室内。ジムに併設されたカウンセリング室のような部屋の中、フィーアは腕組みをして仁王立ちしていた。どうやら、ここがフィーアに与えられた仕事場らしい。

「よーするに、悩みのある人達が勝手にやってくるからその悩みを聞いてやってくれ、ってことね。メンタルトレーナーっていうよりカウンセラーね。何かが間違ってるわ、この団体。」

むう、と眉を潜めるフィーア。が、まあいいや、と、すぐに思考を切り替えると、明後日の方向にファイティングポーズを取り、

「よっしゃ、燃鬼！来るなら来いっ！！」

……………。

「……………はあ。」

ウイングがいてくれればツツコミの一つでも入っていたところだが、生憎と今日はツツコミ役が不在である。さすがのフィーアも調子が狂うらしい。

「どんな些細なボケも、ツツコミがあつてこそ生きるのよねえ…。そう考えると、今日は紛れも無くハンデ戦だわ。」

一体何と戦っているのかは本人にしかわからない。気持ちを盛り上げるかのようにパンパンツと頬を叩くと、フィーアは再びファイティングポーズを取り、

「来るならこーいっ！！！！」

「……………。」

「……………。」

「…えーと。」

「…まあ、座ってみたりしちゃう?」

何ともビミョーな空気が室内に流れた。お約束というものはやっぱりあるものである。

狙ったかのようなタイミングで入って来た若手レスラーを椅子に座らせると、フィーアも椅子に腰を下ろした。

「んで、なにかなあ。ちゃっちゃと話してちょーだいな。」

「は、はあ…」

「おいおい、どーしたどーしたあ?レスラーがそんな覇気のないこととどーする?」

「そ、そうなんですけど…。その事でご相談が…」

「ほおほお?メンタルトレーナーたるこの私に相談とな?…いいでしょう。聞きましょう?」

「……………」

ホントに大丈夫なんだろうか?若手レスラーの顔に、明らかな不安の色が浮かんだ。それを黙って見逃すフィーアではない。

「…むう。」

「…?」

「疑ったわね?」

「は、はい?」

「今、私の事を疑ったわね?」

「え、…ええ?」

「こいつホントに大丈夫なのか?ちゃんとしたトレーナーなのか?そもそも筋肉が好きでここに来たような奴にまともに仕事が出来るのか?だいたい何でそんなに美しいのに裏方なんてやってるんだ?モデルか女優の方が圧倒的に向いているのに、敢えて裏方の仕事をするなんて嫌味な奴め。…とか考えたでしょう?」

「…い、いえ！そ、そんなこと考えていませんっ」

「じゃあ考えなさいよ。」

「は、はあ？」

「私がモデルや女優になったところを考えなさいよ。」

「…؟؟？」

「全てはそこから始まるのよ！万物の始まりは考えることから始まるの！」

「……………」

理解不能

意味不明

困惑の極み

若手レスラーの脳裏に、様々なものが入り乱れ、最終的に、

（何で俺、ここに来ちゃったんだろう）

という、後悔の念だけが残った。

もつともフィーアには、真剣に悩み相談に乗ろうという気持ちは更々無い。

自分の仕事は燃鬼の悩みを解決することであって、それ以外の相手の悩みなど管轄外。テキトーにわけわかんない事言っただけで遊んでやれ。そんな風に考えていた。

こんな調子だと燃鬼が悩み相談に来る来ない以前に解雇処分をくらいいそうだが、そんな都合の悪い事実はどこ吹く風のフィーアである。

「と、いうわけで。」

「へ？」

「ジムに行くわよ。」

「…は、はい？」

「悩むよりもまず行動！うじうじと悩んでる暇があるなら、その時間をトレーニングに充てるべし！それが、自分を成長させる糧となるっ！」

「は、はぁ…でもさっき、万物の始まりは考えることから…って言うて…」

「過去は振り返るなっ！若人が過去を振り返るんなら、百四十五年と少し早いわよっ！」

「は、はぁ？」

「若者よ大志を抱け！ごーほーぶろーくっ！」

「え、えええっ！？」

そう言つて男の腕を掴んだフィーアは、問答無用でジムへと駆け出していた。

…一方、

「右二本、そこから左。」

「はいっ！」

バシッ！バシッ！ズバーンッ！

「右の戻しが遅いです。左を決めるために右を打つなら、右はもっと早く。」

「はいっ！」

ミットなど構えて、完全に打撃指導など始めてしまっているウィングがいた。

さらには、指導の順番待ちなどしている選手もいるこの状況。

（早いとこ仕事に取り掛かりたいんですけどねえ…。）

こちらもちらで困惑な状況のウィングであった。



### 第三話「レスラーの運命救います(2)」(後書き)

一話あげるのにかなり時間がかかっております(^.^;)。ぼちぼちと書き進めてまいりますので、気長に読んでいただけると嬉しいです。今回も読んでいただき、ありがとうございました。

#### 第四話「レスラーの運命救います(3)」(前書き)

作中に登場する固有名詞は、実在のものとは一切関係ありません。

#### 第四話「レスラーの運命救います（3）」

「……ふう。」

夕刻。やれやれ、といった感じで溜息をつくウイング。

メンタルトレーナーとして来たはずが、何故か技術指導まで行い、さらには練習スケジュールの作成までお願いしてしまったこの男（完全にディステイナー様の悪ふざけですよ…）

こういう上司を持つと苦労します、と、ウイングはもう一つ溜息をついた。

今日の練習は終わり、選手達は皆帰路についていた。

「…結局、今日は話すら出来ませんでしたね。」

彼の本来の仕事は、所属選手の一人、アテナを試合で勝たせること。そのためには、まず彼女がどんな人物なのかを知りたいところだったが、今日はいろいろと忙殺されて仕事にならなかった。

（明日に期待しましょうか。）

気持ち切り替えると、ウイングはジム内の見回りを始めた。本来、コーチとして来た人間がする仕事ではないのだが、何故かこんな仕事も組み込まれていた。

（なんだか便利屋扱いですよ…っていうか、今日来ただかりの人間にやらせていい仕事なんでしょうか？）

心に大きな疑問を抱きつつ、ウイングは見回りを続ける。人氣が無くなりしんとしたジム内。練習中の熱気が嘘のようだ。

（まあ、人は残っていませんから、見回るとしたら忘れ物とか電気の消し忘れとか…）

等と考えながら見回っていたウイングの足が、ぴたと止まった。

（……………？）

ジム内のトイレに、まだ明かりがついていた。しかも中からは、ブラシで何かを擦るような音。

（誰かが掃除してるのでしょうか？）

だが、掃除の業者が出入りしている、という話は聞いていない。

（選手は皆帰ったはずですし…代表自ら掃除してる、とか？）

が、自ら掃除をするような代表なら、見回りをコーチにさせるようなことはしないだろう。

（ふむ…）

コン、コン、

「あ、はぁい。どちら様ですかぁ？」

ウィングがトイレのドアをノックすると、なんともんびりした声が返ってきた。

「そろそろ戸締まりをしようと思っているのですが…掃除中ですか？」

「あ、すいません。もうすぐ終わりますので。」

「……………」

待つこと5分程。水が流れる音がして、ようやく、

「お待たせしました。」

ドアが開き、のんびりした声の主が姿を現した。

「え……………」

小さく驚くウィング。ぱちくりと一瞬きをして、改めて相手に問い掛けた。

「…アテナさん？」

「はい」。そのような名前で呼ばれております。」

のんびりした笑顔を見せて、アテナはウィングに答えた。

「え」と……」

「何でしょう？」

「何故トイレ掃除を？」

「トイレは綺麗な方がいいからです。」

「いや、そういう意味ではなくて……ああ、当番か何かですか？」

「いいえ？ 私がここに来てからは、ずっと私がやってますよ？」

「はあ……。まあ、若手が掃除をするっていうのは、縦社会においては普通のことかもしれませんが、ずっとお一人で？」

「はい」。このトイレ掃除と、道場内の掃除と、シャワールームの掃除と、寮の掃除と……」

「ちよつとすいません。」

「はい？」

「今言ったこと、全部お一人で？」

「はい」。

「……何でそんなことになっているんですか？」

「何で、って……？」

「明らかに一人でやる量じゃないと思うのですが……」

「あはは、そんなことないですよ。一人で十分出来てます。それに、嬉しいんですよ。」

「？」

「こうやって綺麗になると、みんな喜んでくれるんです。綺麗になつてないと、みんな不機嫌です。それはいけないこと。みんながいい気分できてくれるのが、私の幸せなんです。」

「……だから、全部一人で？」

「はい」。

「誰かに手伝ってもらったりとかは？」

「そんなの、申し訳ないじゃないですか。私がここに来たばかりの時、みんなめんどくさそうに、いやいや掃除してたんですよ。そんなの駄目なんです。不機嫌はいけません。」

「…だから？」

「だから、全部私がやることにしたんです。そうしたら、みんないつもニコニコしてくれて、私も嬉しくなるんです。」

「…まさか、とは思いますが。」

「はい？」

「試合は全力で戦ってますよね？」

「それが、全力を出したら私が勝ちそうになっちゃいまして…。相手の方が負けて傷つくのは私堪えられません。だから、全力は出せないんです。」

「で、一度も勝ったことがない、と。」

「はい。よくご存知ですね。」

（…どうしたものか…。）

話を聞きながら、ウイングは頭を抱えてしまった。

彼女が大変に慈悲深い性格なのであることはわかった。だが、勝負事において、それは大部分でマイナスに作用する。

というか、そもそも彼女は何故プロレスをやっているのだろうか。そこにウイングは引っ掛かっていた。

「あの、」

「なんでしょ？」

「何でプロレスラーになったんですか？」

「何で、と申しますと、きっかけですか？」

「はい。」

「それは、辛い思いをする人を減らすためです。」

「…は？」

話がさっぱり見えないウイングに、彼女はさらに言葉を続けた。

「勝負事には、必ず勝者と敗者が生まれます。それは、世の理。仕方のないことです。そしてそれは、私一人の小さな力ではどうにもならないこと。」



が、いきなりトレーニングに乱入し、しかも無茶苦茶高い身体能力を発揮して壮絶な指導を行いだしたのだから。

「強靱な精神は強靱な肉体に宿るっ！悩みがある奴はとことんまで鍛えまくってやるわっ！！」

はた迷惑なフィーアの悪ノリであつた。

「…その辺にしてやってくれねえか。」

「んあっ！？」

「鍛えるのは結構だが、ものには限度つてもんがあるからな。」

「ほほお…？」

さすがにやり過ぎと見たのだろう。レスラー達の中でも、一際体格のよい男が二人の間に割って入った。

「いい度胸してるわねえ…」

「度胸がなきゃ、レスラーは務まらないのでな。」



#### 第四話「レスラーの運命救います(3)」(後書き)

時間がかかりましたが、なんとか形に出来ました(････)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1235f/>

---

再び、その運命救います

2010年11月23日17時47分発行